

仏女新聞

仏女新聞社 飯島可琳

秋もだんだんと冬に近づいてきて、長袖の服を着る日が多くなってきました。冬になると雪が積もったお寺にお参りするといふ楽しみもあるのですが、まだまだその時期ではないので、今回は京都国立博物館の「京（みやこ）へのいざない展」を紹介しま

特集ー京（みやこ）へのいざない展

宝誌和尚像 西往寺



宝誌和尚像は顔が割れているので、一度見たら一生忘れられないくらい印象に残ると思います。

コラム①

「なぜ顔が割れているのか」

ある日、皇帝が派遣した絵師が宝誌和尚の絵を描こうとする時、顔が割れ、中の顔がほとんど変わって描けなかったそうです。その伝説にちなんでつくられたので像の顔が割れています。顔の中から出てきた顔は十一面観音でしょうか。観音菩薩は姿を変化（へんげ）させるらしいですから、顔が割れて十一面観音が出てくるということ。宝誌和尚の偉大さを伝えたかったのかも知れませんね。

コラム②

「粗彫り」

像の全体を見るともともとよく分かるのですが、この像は主に見て粗彫りされています。顔が割れているという少し怖い造形を親しみやすい像として彫るためには粗彫りが必要だったのではないかと想像しています。もし、

この像が鎌倉時代のような写実的な仏像だったら、顔が割れた部分に血管が浮き上がっていたり、顔の皮が薄くはがれていたりと、とても怖いものに仕上がってしまうのではないのでしょうか。

この宝誌和尚は珍しい像なのにあなたかみがあつて、小さい頃から近くにあった仏像のような感じがしました。

コラム③

「水瓶の色」



右の写真を見てください。宝誌和尚が手に持っている水瓶が少し赤く光っています。夕焼けの空の色によく似ています。水瓶には功德水が入っていると最近海龍王寺住職の石川重元さんに聞きました。功德がある水とはどんな水なのでしょう。この宝誌和尚の水はあなたかみ、ほくほくとした水ではないかと思

ました。功德水を飲んだら、冬にあなたかみものを飲んだり食べたりしたときのホッとした気分になれるそうです。

伝観音菩薩立像 清水寺



この観音菩薩は飾りが少なく、漆がはがれて、木の面がところどころ見えています。

清水寺という「舞台」が有名で、仏像に気づかない人もいます。京都の仏像の多くは京都のにぎやかなイメージに似合っています。清水の舞台もにぎわっています。この観音さまは人が少ないお堂の静けさに似合うような気がします。心を静めてみると、京都の歴史と風景が思い浮かんできたりすることも知れませ



私はこの観音さまのしなやかなポーズに心が引きつけられました。後ろから見ても前から見ても美しいからでしょうか。博物館にいても、思わず手を合わせたくなりそうです。この観音さまは、この場に飛んできたり、どこかに急いで出かけてしまったりすることがないように見えます。長い間同じ場所で待っていた様子に見えました。「いつでも準備ができていますので呼んで下さい。」という感じです。しなやかなポーズだけでなく、いつでも陰ながら見守っているようなまろい優しさをあらわす「観音さまの動き」にも引きつけられているのかも知れません。

自分が「好きだな」と思う仏像には引きつけられる理由が必

ずあると思います。それを考えながら見れば、その仏像のこともっと知ることができたり、もっと好きになったりするかもしれませんよ。

博物館ならではの光景



これは博物館だからこそ見ることが出来る光景です。ガラスケースに反射した仏像とガラスケース越しに見える仏像が重なって異空間が生まれています。このようなところにも注目すると、博物館をより満喫できそうです。

大日如来・不動明王 金剛寺



この大日如来と不動明王はかなり背が高く大きな仏像です。どうしても「大きさ」ばかりが目が行ってしまいそうですが、じっくり見れば見るほど興味がわいてきます。不動明王はどっしりと構えて、動きが見られません

が、まさに「不動（全く動かない）」の明王だと感じるようになります。飛び出した目は明王らしい怖さがありますが、眉間にあるしわや歯を噛みしめた口元は、怒っている動物のようで愛嬌を感じます。

探してみよう！楽しい！

大日如来さまの飾りに注目してみてください。京都国立博物館研究員の浅見龍介さんによると光背の小さな仏像は金剛界曼荼羅の大切な部分（成身会）を表したものだそうですが、頭の上で合掌したり、手をにぎって首のつけねにおいたりした面白いポーズの仏像もおられます。

二階にのぼると大日如来さまのもっとりの形を見ることが出来ます。一体どんな形でしょう？



を像を
なり仏
鏡より
などよ
眼鏡し
単うと
眼使し
鏡楽

写真は博物館と寺院の許可を得て撮影して掲載しました。ありがとうございました。